

闍提波羅蜜（忍辱）

忍辱

持戒の話をおわかりましたから、ついで第三、闍提波羅蜜について申し上げます。闍提は訳して忍辱と言います。

忍辱、忍は忍耐又は堪忍の忍であつて耐え忍ぶことであります。辱とは漢音では辱じやくでありまして恥辱とか、侮辱とか、屈辱とか綴ります。辱ははづかしめるといふ字であります。そこで、忍辱とは、他人からはづかしめられるのをじつと耐え忍ぶことであります。

尊ばれ、大切にされ、讃められるかわりに、辱しめられ、侮られ、軽蔑されることは辛いことであります。それをじつと耐え忍んでゆくことは出来難いことであります。

忍辱波羅蜜といへば一切の侮辱を忍ぶことであります。唯に、他人からのそうした辱しめを忍ぶだけかといへば、決してそれだけではなくて、一切の苦悩に対してよく忍ぶことを教えられたのであります。

大地は苦悩に満ちた所であります。生きるとは苦しむことであります。随つて苦しみに対して処してゆく道がおしえられなければなりません。

私は今、それを中国山脈のうねうねと続くその一脈の流れる所、鶉木峠うずらぎとうげの高所ではるかに、山県佐伯を隔てる山又山をながめつつ書いています。山又山をながむる時、思ひは遠く馳せとびます。大地の苦悩を背負いきつて、泣いている幾多の同胞が、私に語りかけます。

苦悩！ 苦悩！ 又しても私の心は暗くなります。あまりに多くの人を知るが故に。私は限りなく煩悶せる多くの同胞と共に、仏のみ教を聞きたいと切念致します。

三毒

布施や、持戒にそれぞれ三品があつたように、忍辱にも亦三忍がなくてはなりません。三忍とは云く、

他毀忍辱

安受苦忍

觀察法忍

以上の三忍であります。

他毀忍辱

先ず第一の他毀忍辱とは、他の衆生が、我に対して与える悪罵、嘲笑、侮辱等に対して、瞋恚の心をおこさぬことであります。

これはなかなか出来難いことであります。けれども考えて見ずにはいられません。大地の上は、決して人と人とが、正しい評価のみによつて生きてはいません。時には正しいが故に虐げられることもあり、誤解されて罵られることがあり、陥れんがため

に攻撃されることがあり、温順なるが故に馬鹿められることがあり、侮られて辱められることがあります。人には決して、他を毀^{きず}けてはならない、我が生きてゆくべき埒^{らち}を超えて、人を傷つけてはならないという、用意をして生きている人ばかりではありません。心の欲するままに動いて、人を傷つけ、虐^{あだ}げても平気である人が多いようでもあります。

積尊は、他が私を辱め侮り罵るからとて、我も亦それによつて讐^{かたき}をとれとは言われなかつたのであります。そこにこの忍辱の道が示されたのであります。

持戒の生活が、他の人を傷つけないことを心掛ける生活であるならば、忍辱の生活とは、他が我を傷つけるのを恕^{ゆる}すことでもあります。怨をかえさないことでもあります。辱めを忍受することでもあります。他毀忍辱とは………恕^{じよ}であります。

仏弟子たちがこの忍辱を行じて来たことはもちろんであります。古来大事をなせる志士仁人は悉くこの一切をゆるす太い腹を持っていました。

ここに心すべきことは、心には言いたいことを持ち、怨を怨でかえしたい心を持ちながら、弱いが故に、言い得ず、返し得ないで、心の内に燃やしているのは、決して忍んだのではないということでもあります。それでは却つて、心の中に嫌なものが鬱積されて、やがて、自らを亡ぼします。言い得るにかかわらず、行い得るにかかわらず、自らが自らの生活を尊ぶが故に、言わず行わずして忍ぶ強者の道が忍であります。

安受苦忍

つぎに安受苦忍とは、如何なる苦境に立つても、決して悲観絶望せず、智的快活を失わないことでもあります。人は七度の浮沈みと言いますが、一生の間には、誠に死んでしまいたいような、苦しい立場におかれることが幾度かあります。如何なる人にもそれがやって来ます。その時決して散乱れる感情の波に乗つてあわてて事をなすべきではありません。そこには、必ず明快な智慧光によつて、よくその苦悩を克服して、その苦境に、活路を打開しなくてはなりません。

「人生に袋町^{ふくろまち}なり」と言います。よく忍べは、必ず道は開かれます。如何に恐るべき大風も一週間とは吹かない、如何に長雨だとして、一年は降り続かない。然るに、苦悩の底に墮ちはじめると、人間は杞憂^{きゆう}を持ちはじめます。行き詰まるであろうという心配を持つ、この杞憂が、心配が、自殺さすのであります。明日の食を持たぬ犬や猫が決してそれ故に自殺しない。しかし人間だけが自殺する。それは杞憂するからであります。

若し、与えられねば餓える覚悟で立つならば、必ず生きる道は開くと共に、その苦悩が、その人の底力をつくつてくれ、やがての日の活動の尊き力と経験とを恵んでくれます。

堪忍、忍耐、一生忘れてならぬ文字であります。苦以外に決して人間を作つてくれない。温室の草花は、寒の中には枯れてしまう。雪の中に氷の中にさらされた梅にしてふくいくたる香を放つのであります。人物は必ず苦悩の中から生まれる。「艱難汝を玉にす」とは誠に至言であります。

そこで、安受苦忍、苦境に智的快活を失う勿れ……この境遇に対する忍耐は、裏から言えば精進であります。精進とは、一つの理想、大道に生きる姿であった、この積極的な精進がなければ忍辱は成就しません。忍辱のない処には、精進はありません。道を求めて出ようとするとするならば、すぐ暑さを忍ばねばならない。何か事業を成しとげようとすれば、ふりかかつて来る苦しみを越えねばならない。法蔵菩薩のお誓い、

「假令身止

假令身を

諸苦毒中

諸の苦毒の中に止くとも

我行精進

我が行は精進にして

忍終不悔

忍びて終に悔いざらん。

我行精進の中には、諸苦毒がつきものです。その精進があればこそ、忍終不悔との忍辱道が生まれます。忍んで遂に悔いしない忍辱があつて我行精進と言われるのです。精進と忍とは同一であります。ですから、成唯識論には「忍は無瞋と、精進と、審慧と及びそれによりておこる三業を性とす。」と説かれたのであります。無瞋は前に述べた他毀忍辱であり、安受苦忍は、精進を性とするのであります。

觀察法忍

第三は、觀察法忍であります。忍辱の根本的意義であります。觀察法忍とは、明らかに諸法の真理を認識することであります。さきの、成唯識論の「忍は無瞋と精進と審慧と及びそれよりおこる三業を性とす。」との説の、審慧であります。諸法を審に知る智慧であります。

六波羅蜜の最後は智慧であります。この智慧が失われた時、六波羅蜜は全て失われます。智慧一つにおさまるのであります。そこで、この忍辱の中にすでに、このことが明かされているのであります。

真実の忍辱は、教養によらねばなりません。智慧によつて、一切の法の道理がわからなければ成就しません。行き詰まった時、人に相談するのも、ものの道理を聞いて道を開こうとするのであります。真理に対する眼、人生に対する眼、自己に対する眼、そうした智慧の眼が開かれた時、複雑な中に単純な道を見出すことが出来るのであります。正しい認識なくして忍は決して成就されません。

親鸞聖人の御領解によれば、智慧とは信心であり、念仏であります。念仏の智慧、信心の智慧それが仏道の眼目であります。

我等は念仏道こそ、真の忍辱の道であることを知るのであります。

龍樹大士に聞く

私は今、朝の時を合掌しつつ、静かに大智度論を拝読しつつ、龍樹大士にお会い致しております。大智度論、第二十四、第二十五に、この忍辱について極めて詳細に説かれてあります。今その要点のみ極めて簡単に述べることに致します。

先ず初めに、菩薩は、

「忍辱に二種あり。生忍と法忍なり。菩薩、生忍を行ずれば無量の福德を得、法忍を行ずれば無量の智慧を得。福德智慧二事具足するが故に所願の如くなるを得。」

とあります。

即ち忍辱に生忍と法忍との二種があり、生忍によつて、福德を得、法忍によつて智慧を得ると言われます。然ればこの二種の忍とは如何なることであるか。

生忍

大智度論二十五に、

「云何が生忍と名く。」

諸の恭敬供養の衆生及び、諸の瞋恚姪欲しんのういんよくの人を忍ぶ、これを生忍と名づく。」

と定義づけられてあります。何を意味するのであるか、二十四に逆戻りしてその意味を聞きます。

龍樹は、衆生に二種ありと言われる。一は、菩薩に向かつて、恭敬、供養するもの、二は、瞋恚し悪罵し打害するものであります。

忍はこの二者にはたらきまず。

一体、煩惱を結使けつしという。二種の結使がある。結使とは煩惱のことです。苦を結成するから結、我を驅使おいつかいするから使、結も使も煩惱のことであるが、この結使に二種ある。

一者は、属愛結使、二者、属恚結使であります。

恭敬供養は、我に恚いかりの心を起こさないけれども、愛着の心を生ぜしめますから、属愛結使であります。誠に我を敬い、我に供養する人を愛し、恭敬供養そのものに執着し、せざる人を遠ざけるは凡夫の常であります。であるから恭敬供養を軟賊なんぞくと言います。この軟賊と戦つて、自ら忍び、著せず愛せずよく忍ぶことが生忍の第一であります。

この利養におぼれることは恐るべき瘡かさを得ることです。されば「譬えば、皮を断ちて肉に至り、肉を断ちて骨に至り、骨を断ちて髓に至る、人利養に着せば、則ち持戒の皮を破り、禅定の肉を断じ、智慧の骨を破り、微妙善心の髓を失う」と大士は誡められています。

つぎに菩薩は、恭敬供養する反対に瞋罵打害、即ち瞋いか罵り打ち害する人に対してよく忍ぶことを微に入り、細に入つて説かれてあります。

大智度論には、

「復次に菩薩、若し衆生来つて悩乱をなすを見るときも、当まごに自ら念言すらく、是れ我が親厚となす、亦これ我が師なり、益々親愛敬心きやうしんを加えて之を待たん。何を以ての故に、彼若し衆悩を加え我を悩まさずば、則ち我忍辱を成ぜじ、是を以ての故に、言わく、是れ我が親厚、亦是れ我が師なりと。」

とあります。即ち我を怒り罵る人は、菩薩に忍辱を成就させて下さる、親友であり、我が善知識だというのであります。ここまで来ると、忍辱の天地の廣大を思はずにはいられません。

しかしこれは決して瞋恚の奨励ではありません。菩薩は瞋恚に報ゆるに、瞋恚をもつてせず、それによつて忍辱を成就しようとするのであります。

されば、大智度論には、

「復次に当に観ずべし。瞋恚はその咎最も深し。三毒の中これより重きは無し。九十八使中これを最堅となす。諸心病中第一の難治なり。瞋恚の人は、善を知らず、非善を知らず。罪福を観ぜず、利害を知らず、自らを憶念せず、当に悪道に墮して善言を忘失すべし。名稱を惜しまず、他悩を知らず、亦自ら身心疲悩を計らず。瞋眼えげんは慧眼を覆い、専ら他悩を行ず。」

と厳しく誡められてあります。忍辱とは、瞋恚を遠ざかり、瞋恚の人に対しては「是我親厚、亦是我師」と合掌することであります。

更に龍樹は「姪欲之人」と戦うべきことを色々例話を挙げて教えられています。若き日愛欲につまづいた経験のある龍樹はこれを求道者に誡めたまうも偶然ではありません。色欲は謹むべきであります。

以上、恭敬供養の人に対して貪ろうとする心をおこさず忍辱することと、その反対に、諸の瞋悩姪欲の人に対して忍ぶこと、これを生忍というのであります。

法忍

つぎが法忍であります。

大智度論には、生忍と法忍を比較して、

忍諸恭敬供養衆生及諸瞋悩姪欲之人

（諸の恭敬供養の衆生及び諸の瞋悩姪欲之人を忍ぶ）……生忍

忍其供養恭敬法及瞋悩姪欲法

（其の供養恭敬の法及び瞋悩姪欲の法を忍ぶ）……法忍

とされております。人を忍ぶのが生忍、法を忍ぶのが法忍だというのであります。

法忍について述べます。先ず大智度論には、

「今、法中忍を説くに、法に二種あり、心法、非心法なり。」と説かれてあります。

法中に、心法、非心法の二つがある。その心法とは我々の心の中に起こる事項であります。即ち「一には、瞋恚、憂愁、疑等」であり二には「姪欲、憍慢等」であります。この心の中におこる二法に対して「能く忍んで動かざるを、是れ法忍と名づく」のであります。これらに害せられる時「菩薩道を害う」からであります。誠に、これら煩惱の心そのままに走って、醜き残骸を白日に曝している姿が毎日の新聞の三面を賑わしています。煩惱のない所には、菩薩道はない。しかし、煩惱のままに放縦である時にも菩薩道はあり得ない。心すべきことであります。ですから龍樹は「正思惟の故に、煩惱ありといえども、而も能く随わず」と言っけていられます。以上は心法の忍であります。

つぎに非心法というのは、心の外にあるもので、内忍と外忍とに別たれてあります。

内忍とは、飢渴とか、生老病死等に対して忍ぶことであり、

外忍とは、寒暑風雨等外よりの苦を忍ぶことであります。

内忍

龍樹は、

「飢渴寒熱これ外魔軍、結使煩惱これ内魔賊、我当にこの二軍を破り以て仏道を成すべし。」

と説き、やがて、

「菩薩言わく、我今当に汝の大力内軍を破るべし。何に況や外軍をや。魔言わく、何等をか是我が内軍という。答えて曰く。

欲は汝初軍	憂愁為第二	（欲は是れ汝が初軍なり 憂愁を第二と為す）
飢渴第三軍	渴愛為第四	（飢渴は第三軍 渴愛を第四と為す）
睡眠第五軍	怖畏為第六	（睡眠は第五軍 怖畏を第六と為す）
疑悔第七軍	瞋恚為第八	（疑悔は第七軍 瞋恚を第八と為す）
利養虚称九	自高蔑人十	（利養虚称は九 自高蔑人は十なり）
如是等軍衆	厭没出家人	（是の如き等の軍衆を 出家の人に厭没す）
我以禅智力	破汝此諸軍	（我禅智力を以て 汝の此の諸軍を破り）
得成仏道已	度脱一切人	（仏道を成ずることを得已つて 一切の人を度脱せん）

菩薩ここに於いて諸軍を未だ破ること能わずといえども、忍辱の鎧を著、智慧の剣を捉り、禅定の楯を執り、諸の煩惱の箭を遮る、是れを内忍と名づく。」と説いておられます。

即ち菩薩は、内におこるあらゆる煩惱の悪魔と戦つて、よく忍を行ずるのであります。これが即ち法忍であります。内忍であります。

法忍

龍樹菩薩は、この内忍をときつつ、何時しかに、智慧の世界に入つていられます。即ち、「種々の智慧門に入つて、諸法の実相を觀じ、心退かず、悔いず、諸觀に隨わず、亦憂うる所なく能く自利利他を得。これを法忍と名づく。」と説かれるのがそれです。

大士は、三法印、即ち第一には、諸行無常印（一切有為生法無常等印）第二には、一切法無我印、三には涅槃実法印の、三法印をよく受けて、中道に生きることを法忍と言つていられます。

即ち、法忍とは、前の、觀察法忍……真理を正しく認識すること、の法をはつきり知らして頂くことを法忍というのであります。

み法を知らずして、どうして眞実の忍辱があるう。

諸行無常を知るが故に、生死に執着せず、涅槃の常住を知るが故に、大信に生きるのであります。

智慧を得ることが、仏道の全てであります。その智慧が法を知る所以であります。親鸞聖人にあつては、智慧とは南無阿彌陀仏の信心のことでありました。他力廻向の信心の智慧が自然のことわりにて、柔和忍辱を我の上に成就するのであります。

觀無量寿經にあつては、大地の凡夫韋提希の得た世界を「無生法忍」と説かれてあります。無生法忍とは、他力の信心のことであります。無生法忍とは、もと、眞如法

性の生なく滅なきを悟ることである。然るに今は、他力の大信心を得るを無生法忍と説かれたのであります。

この無生法忍を、善導は、喜忍、悟忍、信忍の三忍に分かたれました。蓮如上人は「喜忍というは信心歡喜の得益をあらわすなり。悟忍というは仏智をさとする心なり、信忍というは、すなわちこれ信心成就のすがたなり。」と釈せられました。

信心が「能帰の信、所帰の仏智と相応す」ることである以上、仏智に生かさされ、仏智をさとり、仏智を頂き、仏智に歡喜することが信であります。遂に法忍は大信心につきるのであります。

されば龍樹は、忍辱波羅蜜を説き去り、説き来たつて遂に、

「般若波羅蜜中（智慧）に住して能く闡提波羅蜜（忍辱）を具足すと説く。」と結ばれました。般若とは、智慧であり、智慧とは信心であります。

我等は信心の智慧によつて、よく内と外との苦惱煩惱を忍ぶことが出来るのであります。

忍辱即ち生活

前では、龍樹大士のみ教を聞きました為にかなり難解でありましたが、忍ぶということが、普通常識的な意味でも使われているために、忍ぶとは唯、極めて消極的なことで、弱い人間が唯苦しいのを、嫌々ながら忍んでゆく、あきらめて過ぎてゆくことだ位に考えられています。しかしその程度の忍は真実の忍ではあり得ません。7
前を今一度はつきりと読みかえして頂きたいのですが、忍とはつまり、道そのものを生きてゆくには、必ずなくてはならぬ、生活の根本的な態度であります。ですから、忍辱には、その根本に、智慧があつて、み法そのものが、はつきりと体得されて来なくてはならない。信心の智慧そのものに、必ず忍辱を具足しているのであります。即ち信心の智慧に生きるものの生活即ち忍辱であります。

有力大人

ですから遺教経を拝読しますと、
「汝等比丘、若し人有り来たりて、節々に支解するとも、常に自ら心を損めて、瞋恨せしむることなかれ。亦当に口を護りて、悪言を出すこと勿れ。若し恚心を縦にすれば、則ち自ら道を妨げ功徳の利を失す。忍の徳たる、持戒苦行も及ぶこと能わざる所なり。能く忍を行ずる者は、乃ち名けて有力大人となすべし。若しそれ悪罵の毒を歡喜受すること、甘露を飲むが如くすること能わざる者は、入道智慧の人と名けざるなり。所以は何ん。瞋恚の害は、則ち諸の善法を破り好名聞をやぶる。今世後世人見んことを喜わす。」

静かに味わうべき至言であります。大意を申し述べると、

「汝等比丘よ。若し人が来て、体を一寸刻みにしようとも、自ら心を損めて………大信心に住して、いかり恨んではならない。亦口をまもつて悪い言葉を出してはなら

ない。若し瞋恚を平気で言葉に移して、ほしいままにすると、自ら道をさまたげ、功德の利、自利利他の世界がなくなってしまう。」

自妨道 失功德利（自ら道を妨げ、功德の利を失す）とは味わうべきみ言葉であります。我等は常にこのことを悲しくも経験するものであります。忍が出来ねば、道をさまたげます。功德を失います。であるから、

「忍の徳たる、持戒苦行も及ぶことが出来ない。

能く忍を行ずる者は乃ち、有力の大人である。」と言われます。

確かに力有る大人物は、特に真の菩薩は、如何なる苦惱にも、忍びきることの出来る人であります。

「悪罵の毒」即ち、人の悪口雑言、罵りを、「甘露」の妙味を飲むが如くすることの出来ない者は入道智慧の人とは名づけられない。

忍の徳のない人は、世間から悪く言われ、今も将来も、人から嫌われる。

……………

誠に親切なみ教えであります。

聖人と忍辱

以上のみ教によつてもわかるように、忍の徳は実に道を生きようとする者には、必ず具わらなくてはならぬ徳であります。道を得て、現実の苦海に処してゆくには、一日一時といえども忘れることの出来ぬ道そのものが忍であります。誠に心すべきであります。

ですから古来の聖賢で、この忍辱の徳を發揮しなかつた人はない。忍ぶことによつてよく勝ち得るのであります。我等は亦一道を精進しようとするれば、必ずこの徳を成就しなければなりません。

これを親鸞聖人に見るも、叡山二十ヶ年の修行の間、困苦欠乏と戦い求道精進され、やがて吉水に下り、法然上人のお弟子となられてからも、世の迫害避難を忍びきつて念仏道に生きられ、やがて三十五歳、北越の天地に配流せられ、雪を褥に石を枕にし、板敷山に首をねらわれる等々、九十歳の夕べまで貧困の中に忍ばれた、その御一生は、実に、忍の一字につきると言つてもいい。

誠に法蔵菩薩の我行精進 忍終不悔の誓願そのままの御生涯であります。注意して御一生の足跡を拝する時、特に光つていられる時は、何時も大きな苦難のおしよせた時であります。その時この忍の光る時であります。

外に勝つと共に、内にも勝つた方であります。愚禿の名において一切の煩惱を越えて、南無阿弥陀仏に生きられたのであります。み法に生きれば法忍であり、法忍によつて更によく一切の悪魔煩惱にも勝つのであります。

信と忍との関係

最後に味わうべきは、歎異抄第十六章であります。

「信心の行者、自然に腹をも立て、悪しきまなることををかし、同朋同侶にもあいて口論をしては、必ず廻心すべしということ、この条、断悪修善のここちか。」

これは、廻心もせず、柔和忍辱のおもいにも任せざらん前に命つきなば撰取不捨の誓願は虚しくなるように考えて、信心よりききに忍辱を成就しようとし、忍辱を信心の条件か、証のように考えた人たちに対する言葉であります。

一向専修の人に於いては、廻心ということただ一度あるべしで、如来の本願の前には、一切を無条件に救われるので、一切の問題を超えて、大胆に即時に救われきる一念を廻心というのであります。それであるから、忍ぶことを救われた条件のように考えていたりすれば遂に如来の智慧に救われきることは出来ません。

しかし、それをはき違えて、信の世界は忍辱とは別の世界であるように考えるのも亦間違いである。そこで「信心定まりなば、往生は弥陀に計われまいらせてすることなればわが計いなるべからず。悪からんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまいらせば自然の理にて柔和忍辱の心も出でくべし」とのみ教であります。信心生活は願力に生きる生活であります。願力に生きれば自然の道理で忍辱の徳を成就するのであります。

我等はここにはつきりとして教判を頂いたわけであります。忍んで生きるに先ず、信に生きなければなりません。

ひとまず忍辱をおわります。